

活動報告（平成 19 年）

1 戦争史関連研究会等

本年の戦争史関連研究会等の特色は、第一に、特別研究「政府及び軍と ICRC 等との関係」に資するため、赤十字関係の研究者を招聘して行われた点である。第二に、戦史部の中期計画策定に資するため、「戦史叢書」を踏まえた戦史研究の今後のあり方に関係する戦史編さん官や研究者を招聘した。

防衛研究所の主要行事である戦争史研究国際フォーラムは、「太平洋戦争の新視点－戦争指導・軍政・捕虜－」と題して行われ、ノンフィクション作家の保阪正康氏による特別講演を皮切りに、日米両国から参加した 7 名の研究者による発表と討議がなされた。戦史懇談会では、戦史研究・教育に従事している自衛隊の各機関から関係者が参集し、戦史研究・教育の現状と問題点について議論を行うとともに、戦史部の寄与のあり方についても要望が出された。

(1) 戦争史研究国際フォーラム

題 目	太平洋戦争の新視点－戦争指導・軍政・捕虜－		
実施月日	9 月 26 日	場 所	アイビーホール青学会館
特別講演	『アッツの玉砕』に見る戦略思想 作家、評論家 保阪 正康		
研究発表	「戦争指導－3つのポイント－」 防衛大学校教授 戸部 良一		
	「アジア・太平洋戦争再考（1937－1945 年）－アメリカの勝利は必然であったか－」 ニューオーリンズ大学教授 アラン・R・ミレット		
	「インドネシアにおける日本軍政の実態－その光と影－」 陸上自衛隊幹部学校研究課研究員 芳賀 美智雄		
	「米国による日本および朝鮮半島南部の占領－比較の観点から－」 米国陸軍大学歴史研究所長 コンラッド・C・クレーン		
	「日本の捕虜取扱いの背景と方針」 防衛研究所戦史部主任研究官 立川 京一		
	「アメリカ軍捕虜と残留日本兵－太平洋戦争の『記憶』形成の視点から－」 カンザス州立大学教授 マーク・P・パリロ		
コメント	慶應義塾大学教授 赤木 完爾		
議 長	防衛研究所戦史部長 加賀谷 貞司		

【概要】

今年度のフォーラムは、「太平洋戦争の新視点—戦争指導・軍政・捕虜—」と題し、米国から当該分野の著名な研究者を招聘して開催された。今回の目的は、近年注目されている軍政や捕虜という側面から、日米それぞれの視点で比較検討することにより、太平洋戦争の実相、特質、そして日米双方の問題点を考察することであった。

「特別講演」では、保阪氏がアッツ島の戦いをモデルケースに、日本軍の戦略思想について在野の研究者としての認識を話された。

「戦争指導」「軍政」及び「捕虜」に関する3つのセッションでは、日米双方の研究者による発表が行われた。まず第1セッションで、戸部教授は「戦争目的の確立」「進軍限界の規整」及び「戦争終結の把握」という3つのポイントに即して、大東亜戦争における戦争指導の問題点を指摘した。一方で、ミレット教授は工業力と技術力の日米の差に着目し、アメリカの勝利は必然であったとしながらも人間の要素の重要性を再確認し、政治意思と軍事能力の相互作用について考察した。

続く第2セッションでは、芳賀研究員は石油資源の獲得、日本による軍事組織の創設・政治参画の促進、及びインドネシア人に対する強制徴用・日本化の強制などを例にして、インドネシアにおける日本軍政の正負2つの側面を分析した。次にクレイン教授は、第2次世界大戦後の米国による日本占領と朝鮮半島南部の占領とを比較し、占領地域の文化に対する占領者の理解、大量の資源投入及び体系的な計画策定等の必要性を指摘した。

最後のセッションでは、立川主任研究官は、太平洋戦争中における日本軍の捕虜取扱いの変容について、その契機となった2つの事態（戦争初期における捕虜の大量獲得及びドゥーリットル空襲）の意義を説明した。

パリロ教授は、日米双方の戦争の記憶が形成される過程において、米国人捕虜及び残留日本兵それぞれの体験がどのように作用したのかについての分析を行った。

「総合討議・議長総括」では、軍政とか捕虜のような新しい側面から太平洋戦争の戦争指導を多角的な視点で捉えることは、今後更に必要であるという点で参加者の意見が一致した。そのような試みとして、今回のフォーラムは、太平洋戦争における戦争指導を改めて検討する上で、極めて示唆に富むフォーラムであったと言える。

なお、本フォーラムの内容については平成20年3月に『戦争史研究国際フォーラム報告書』としてまとめ、国会図書館をはじめとする図書館、公文書館等に配布する予定である。また、その報告書の全内容を、防衛研究所のウェブサイト上の「戦争史研究国際フォーラム」〈<http://www.nids.go.jp/exchange/forum/index.html>〉に掲載する予定である。

(2) 日韓戦史研究交流研究会

平成19年10月31日から11月1日の間、防衛研究所戦史部において第8回日韓戦史交流研究会を実施した。

韓国側から軍史編さん研究所戦争史部戦史室長の梁寧祚（ヤン・ヨン・ジョ(Dr. Yang Yong Jo)）、同戦争史部前任研究員の孫圭錫（ソン・キュウ・ソク(Dr.Sohn Kyu Seok)）、日本側からは防衛研究所戦史部第1戦史研究室から石丸所員が参加した。また、米国からもジェイムス F.デュランド（LtCol James F. Durand）米海兵隊中佐（米国海兵隊太平洋海兵隊司令部第5部（企画）日本－韓国担当）が特別に参加した。なお、コメンテーターを赤木完爾氏（慶應義塾大学法学部教授）、及び葛原和三 1等陸佐（陸上自衛隊幹部学校教官）をお願いした。

今回の研究会の特色は、重要でありながらも史料の不足等からこれまで論じられることが少なかった朝鮮戦争のテーマに関し、日・米・韓の各国の研究者が積極的に意見交換を実施出来たことである。例えば、共通論題の「米軍事顧問団」に関しては今回、米国、韓国側からそれぞれ、韓国軍の胎動と朝鮮戦争との関わりが報告され、さらに、日本側から同顧問団が日韓の軍事施設に与えた影響についてのコメントを得たことは、大変興味深いものであった。

自由論題において、朝鮮戦争の背景・基盤となった事項の中で、今後更なる研究が期待される論題について相互に発表を実施した。日本側からは、朝鮮戦争に対する日本のかかわりを海上輸送に着目して論じ、韓国側からは、朝鮮戦争に到る国際関係上の背景を太平洋連盟に着目して論じたわけであるが、共に価値ある発表であった。

研究会の細部については、下記のとおりである。

日程	区分	論題及び発表者
10月31日(水)	研究会Ⅰ	共通論題：「朝鮮戦争期における米軍が日韓に与えた影響」 孫（ソン）博士、デュランド中佐 コメンテーター：葛原 1 佐
11月1日(木)	研究会Ⅱ	自由論題： 石丸所員：「朝鮮戦争における日本の貢献－日本人による海上輸送－」 梁（ヤン）博士：「太平洋連合の研究－台湾とフィリピンと韓国との関係」 コメンテーター：赤木教授
	研究会Ⅲ	自由討議

(3) 戦史懇談会

実施月日:7月19日(水)	出席者
場所:防衛研究所戦史部	統合幕僚学校 : 井手1陸佐 陸上自衛隊幹部学校 : 長峰1佐、葛原1佐 陸上自衛隊研究本部 : 山口3佐、奥部3佐、平山3佐 海上自衛隊幹部学校 : 比留間1佐 航空自衛隊幹部学校 : 内藤1佐 防衛大学校統率戦史教育室 : 荒川准教授、横山准教授 防衛研究所戦史部 : 加賀谷部長、庄司1室長、大場2室長、 高橋主任研究官、野島主任研究官

[概要]

防衛研究所戦史部の平成19年度調査研究及び事業の概要が発表され、活発な議論が行われた。出席者間の議論において陸・海・空自衛隊の戦史教育の教育内容、対象等は、各部隊の特質から統一化に至っていない状況が確認された他、統合戦史の必要性についての認識を深めることが出来た。

今後も本懇談会を継続開催することにより相互に情報交換を行い、人材の育成等更なる戦史教育の充実を図る旨の合意が得られた。

(4) 軍事史基礎講座

本講座は、各自衛隊の戦史関係者を対象とし、軍事史・戦史研究に必要な基本的事項を習得させるとともに、より一層の素養の向上を目的とした講座である。内容は、昨年度の実施課題を見直し、より体系的かつ履修者が興味を持てるように工夫した。

実施月日	8月27～31日	場 所	防衛研究所
実施課題	<ul style="list-style-type: none"> ・基本編課題目: 軍事史入門、史料検索法、史料理論、論文作成法、戦史研究経験者の講話 ・応用編課題目: 日本陸軍史、日本海軍史、戦後安全保障政策史、世界戦争史、戦後国際関係史 ・選択編課題目: インテリジェンス史、日米関係史 		
受講者	計25名		

(5) 各種研究会

月日(曜日)	題 目	講 演 者 等
1月 24日(水)	戦後日本の安全保障	大阪学院大学教授 佐古 丞
1月 31日(水)	戦史研究のあり方ー太平洋戦争を中心としてー	筑波大学教授 波多野 澄雄
2月 6日(火)	戦後安全保障史研究におけるオーラル・ヒストリー	中京大学教授 佐道 明広
2月 16日(金)	戦後日本の安全保障	京都大学教授 中西 寛
2月 20日(火)	ドイツの1940年のフランス侵攻作戦	オハイオ州立大学名誉教授 防衛分析研究所研究員 ウィリアムソン・マーレー
2月 21日(水)	1941年におけるドイツの戦略決定の文脈	同 上
2月 22日(木)	1943～44年におけるヨーロッパの制空権の争奪戦	同 上
4月 20日(金)	日赤史料概観	日本赤十字豊田看護大学講師 河合 利修
5月 23日(水)	太平洋戦争の再検討	ハーバード大学名誉教授 入江 昭
6月 27日(水)	戦史編纂を振り返ってー今後の戦史研究のあり方への提言ー	元防衛研究所戦史部調査員 近藤 新治
6月 29日(金)	原爆投下と初期救護	山梨学院大学教授 小菅 信子 日本赤十字豊田看護大学講師 河合 利修
7月 31日(火)	太平洋戦争末期における日本陸軍の対米戦争ー水際か持久か？	現代史家、元日本大学教授 秦 郁彦
10月 12日(金)	シベリア出兵と赤十字の諸活動	東京女子大学教授 黒澤文貴 防衛研究所客員研究員 原 剛